



公開セミナー記録
「セミナー断章」
『治療技法論』

2012年2月

講義：藤田博史（精神分析医）

[目次へもどる](#)

セミナー断章 2012年2月11日講義より

第2講：「治療とはなにか？ 治癒とはなにか？」

講義の流れ～第2回講義（3時間）の内容の流れを項目に分けて箇条書きにしました。今回、「セミナー断章」で取り上げているのは、水色の部分です～

本編

精神分析に対する抵抗→臨床で使えるラカン理論→フランソワーズ・ドルトと臨床→赤坂和哉氏の『ラカン派精神分析の治療論』について→ジャック＝アラン・ミレールのこと→ラカンのセミナーの前期・中期・後期→**幻想の式**→ $\$ \diamond a \rightarrow \$ \rightarrow \diamond \rightarrow a \rightarrow -\phi \rightarrow \Phi \rightarrow A \rightarrow -\phi$ と想像界→象徴的去勢 Φ (grand phi)→Aと象徴界→ $\$ - -\phi - \Phi - A - a$ →「狂っている」ということ→性的倒錯→精神病→ボーダーライン→精神病の治療と神経症の治療→a→芸術と症状

質疑応答編

想像的同一化と精神病→ある女性作家と象徴界→ Φ はS1、AはS2→ラカン派精神分析とアクティングアウト→男が男を好きになる二通りの病態→強迫神経症としての男性同性愛→真性同性愛→レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロ→フェティシズム→幻想の式のなかのどこが病んでいるか→ Φ と**S(A)**→女と**S(A)**→日本人男性と**S(A)**→象徴的去勢と女性→治療とは何か、治癒とは何か→教育分析の（不）必要性→補填について→後期ラカン理論と補填→補填と命名→命名と波束の収斂→幻想の式と命名

幻想の式

わたしは、臨床において必要なものは、たった一つしかないと思っています。頭のなかにあるのは一つ、それは前回お話ししたファンタズム、つまり人間の幻想（ファンタズム）の式です。

$\$ \diamond a$

これが幻想の式。ファンタズム。これ一つでいいんです。このなかに全てが入っています。これだけ知っていればいい。これが何たるかを本当に知っていれば、あとは何もありません。例えて言うなら、大型客船でも小さなヨットでも、航路を決めるコンパスは同じです。大海原を、30フィートほどのヨットでも「いってきます」と言って、そのままハワイにでも行ったりできるわけです。巨大な装備はいりません。臨床という広大な海原に出てゆく時も事情は似ています。このファンタズムの式をしっかりと押さえておけば目的地へ向かって確実に進んでゆけるでしょう。但

上の写真は、南仏・ニースの城跡公園にある石畳。

そこにはフランス語でHEUREUX QUI COMME ULYSSESSE FAIT UN BON VOYAGE（幸いなるかな、ユリシーズのようによき旅をしたものは）と書かれている。

し「しっかりと押さえておく」という厳しい前提が付きませんが。

\$

前回の簡単な復習をしてみると、\$ (S barré エスパレ) バレは「斜線を引かれて象徴界から抹消された主体」を意味します。「象徴界」とは、先ほどから触れている言葉のシステム全体のことです。つまり斜線を引かれて象徴界から抹消された主体」とは、言葉のシステムの全体から弾き出された主体のことです。

◇

ポワンソン。日本語では錐印と言います。錐印とは、日常で錐を買うなどという機会もあまりないと思いますが、例えば、彫刻刀のセットなどに刻印が打ってありますね。あるいは通販で「誰々作」とかいう包丁セットなど売っていたりしますが、その包丁セットにコーンと刻印が打ってあったりします。刻印というのはきわめて象徴的な所作です。例えば、駄目な刻印を押される、などという表現もありますね。ポワンソン poinçonは、c にセディーユというヒゲのような記号が付きまゝ。\$◇a エスパレ・ポワンソン・プチャ。S barré poinçon petit a。プチ petit は「小文字」という意味ですが、読むときにプチ・アとは言いません。フランス語をご存知の方には自明のことですが、プチャと繋げて発音します。このような現象をリエゾンと言いますね。したがって、読み方はエスパレ・ポワンソン・プチャとなります。

a

「象徴界から斜線を引かれて抹消された主体」が a に向かうのですが、その間にポワンソン◇が立ちをだかっています。ちなみに、a というのはいくつかの用語の頭文字として考えられます。まず最初に浮かぶのはアムール amour 「愛」でしょう。つまり「斜線を引かれた主体」が「愛」を目指しているのですが、ポワンソン◇が遮っているのです。つまり、両者は永遠に出遭えませんよ、という刻印です。象徴界から抹消された主体がなんとか愛に出遭いたいのだけれど、出遭えない。「永遠にあなたたちは出遭うことはないでしょう」という哀しい宣告。七夕になるといつも雨、みたいなそんな状況です（笑）。ではこの ◇ ポワンソンとはいったい何なのかということが気になりますね。ここでこのポワンソン◇を分解して書いてみましょう。いきなり一気に分解しますよ。\$ - φ - Φ - A - a。今回は分解の過程を書きましたから、今後はポワンソンを見たらすぐにこの分解式を思い出せるようにしていただきたいと思います。

-φ

\$の次に、カエルになる前のオタマジャクシみたいな記号（笑）。これはφフィーです。ギリシャ語のフィー、フィーの小文字だからプチ・フィー。それにマイナスがついているからモワン・プチ・フィー、moins petit phi とこう書きます。これは「想像的ファルスの欠如」を表わしています。「ファルスの欠如の心像」と表現したりもします。

Φ

これは大文字です。グラン・フィー grand phi つまり象徴的ファルスです。-φ が想像的ファルスの欠如であるのに対して、Φ は象徴的ファルスを表わしています。つまりこれは主体が出遭うシニフィアン、論理的に最初のシニフィアンです。実は、主体はこの最初のシニフィアンに出遭い、次のシニフィアンに連鎖する瞬間に象徴界から抹消されて消えてしまいます。これをラカンが主体のアファニス（消失）と呼んでいます。

A

これは大文字の A。これは オートル Autre です。あるいは<他者>。大文字の他者を表記するために、わたしはこのような括弧でくる書き方を提唱しました。20数年前です。普通に書くと「大文字の他者」とか言いますね。あるいは「大他者」とか言う人もいますけれども。そうするとこれ(a)は小文字の他者になります。autre、他者の autre の小文字。これは「小文字の他者」、「小他者」と言ってもいいですね。

◇ポワンソンに相当するのは、[-φ - Φ - A]の部分です。ですから幻想の式を見た時に「知ってますよ、幻想の式ですね、それでなにか？」で終わってはダメです。このような表明はその先へ向かうことの放棄です。そうではなく、ポワンソンを見たときに、瞬時に[-φ - Φ - A]だと頭の中で置き換えることが必要です。これらが\$とaの出遭いを阻んでいる張本人なのです。

-φと想像界

-φ は先ほども申し上げた通り「ファルスの欠如の心像」であり「想像的ファルスの欠如」を意味しています。こ

これはラカンのいう「鏡像段階」に生じるイメージであって、まだシニフィアンではありません。ちなみに鏡像段階とは、生後6ヶ月から18ヶ月の期間、つまり6ヶ月目から数えて1年間という意味ですが、その間に子が鏡に映る自分の姿を見て情動的に反応する時期に相当します。少し説明を加えると(図を描く-図1)「母」「子」の関係がある。ここで母は既に言語の世界に取り込まれています。母は子に対して欲望を注いでいます。言い換えるなら、母は子に欲望のベクトルを向けている(図2)。フロイトの用語を用いるなら、それはペニス羨望(ペニスナイト)の延長上にあります。ペニス羨望とは、自分が持っていないペニスに対する憧れです。欲望ではない。ペニス欲望ではないのです。欲望 Wunsch とわずかに Neid と表現したところに、フロイトの用語に対する繊細さが垣間見えます。母の欲望は、自分の場所に欠如しているもの——欠如しているものを「欠」と書いておきましょう(図3)——欠如しているものの代わりに、これを自分のここにもって来れば、完全なものになるでしょう。これがペニス羨望です。

これについて子の立場から見ると、母の欲望に応える形で、自分が母のペニスであろうとする。そうすると、子供にどんな欲望が生まれるか。お返し(図を描く-図4)。これはどんな欲望かと言えば、母の望んでいる想像的なペニスであろうとする欲望。これを *désir d'être phallus* デジール・デートル・ファルス。母の想像的なファルスであろうとする欲望、*désir d'être phallus*。こういう欲望なのです。そうするとここに欲望の交流が生じる。つまり、母は自分の場所に欠けているものとして子を欲望する、その欲望に応じるように、母の期待に応えるために、子は母の場所に欠如しているファルスであろうとする。その欲望を更に母が欲望する、その欲望を子が欲望する、その欲望を母が欲望する、その欲望を子が欲望する、これが欲望の「交流」です。この「交流」という用語は、人と人との関係を表わすと同時に、情念という電流が交互にめまぐるしく入れ替わるという意味を含んでいます。鏡像段階に照らして考えてみます。子の目線から見ると、ここへ鏡があると思ってください、子とその鏡像との関係、実はそれは自分自身の姿なのですが、鏡像の位置にあるのが $-\phi$ 。それに対峙しているのが ϕ 。これには $-\text{moins}$ モワンがつきません。そこを占めるのは自分自身ですから、ここは ϕ petit phi プチ・フィです。そして $-\phi$ と ϕ がめまぐるしく交錯する、このような関係性の境域をラカンは *imaginaire* イマジネールと呼びます。別の言い方をすれば鏡像的境域です。通常「想像界」と訳されています。

ですから、ここに書いた $-\phi$ というのは——ここに書き込むのはわたしの表記の仕方であってラカンの表記ではありません——想像界を挿入しているわけです。いきなり現実界から象徴界に接続されるのではなく、いったん想像的なファルスの欠如を介してから、象徴的なファルスへと移行する。象徴的なファルスへ移行する前の母子関係は、言ってみれば愛と憎しみの交錯する危険な関係です。言葉を獲得する以前の関係であり、こう言ってよければ近親相姦的な関係です。

象徴的去勢 Φ (grand phi)

この危険な二者関係の仲に、言ってみれば格闘技のレフェリーのように、さっと二者の間に入って両者を分ける。ここで二者関係は三者関係へと移行する。二者の間に一つの壁が入る。これが Φ grand phi グラン・フィーです(図5)。こうして母と子の近親相姦的な関係は分断される。これを「象徴的去勢」と呼びます。つまり去勢とは、母と子の間の性的関係を断つこと、ざっくり言えば、男の子がお母さんにおちんちんを行使することを禁止することです。つまり実際におちんちんを切るわけではありませんが、象徴的に両者の関係を断ち切ること、それを象徴的去勢と呼んでいるわけです。ですから Φ は象徴的去勢の印になります。発達の視点から言えば、これは最初に言葉を獲得する段階に相当します。この時に、子は母の代わりに言葉——厳密にはシニフィアンですが——を掴まされる。そして目眩く意味に溢れた言葉の世界へ入ってゆくことになる。ですから、子は、本来母を求めていたにもかかわらず、母とは全然違う Φ を掴まされてしまう。母ではなく、その代わりにもの、言ってみれば母の代理物としての偽物を掴まされてしまうわけです。そこからはもう果てしない偽物の世界。掴んではみたが「これママじゃない」「これも違う」「これも違う」と、欲望は満たされることなく、シニフィアンを連続的に掴み続け、言葉の世界へ入って行くことになる。

A と象徴界

したがって、この A、大文字の他者、というのは、言葉全体のことです。さらに厳密に言うなら、言葉全体の中から、 Φ だけを差し引いた残りなのです。だから、 Φ とAを合わせて「象徴界」と呼ぶのです。フランス語では *le symbolique* サンボリックと、敢えて男性名詞として呼んでいます。ちなみに通常用いられる女性名詞としての *la symbolique* はある時代や民族などに固有の象徴体系を指すのに用いられます。

\$ - ϕ - Φ - A - a

斜線を引かれて抹消された主体が、生の欲動に運ばれて、突き進んで行くその先には、まず「想像的ファルスの欠如」があり、次に「象徴的なファルス」があり、そして言葉で構築された世界があり、そしてその先に永遠に到達できない愛がある、という訳です。したがって、わたしたちが現実には生きている世界とは、このオレンジ色で囲んだ $[-\phi - \Phi - A]$ のことなのです。全てが言葉——厳密にはシニフィアン——によって構成されている。そこには人間の創り出したものすべて、科学、文化、政治、経済など、すべてがこの中に収まっています。この多様な世界も、それらは決してあらぬ方向に向かっているのではなく、いわば一つの磁場の中に——地球に南北に走る磁場があるように——\$からa (petit a プチタ)に向かう磁場の中に構成されている。言い換えるなら、世界とは、\$とaで作られる磁場の中で、構成されている象徴的なものの総体なのです。そして人間の創作活動の彼方には

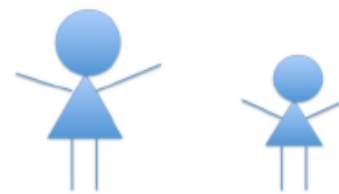


図1

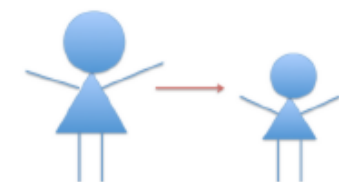


図2

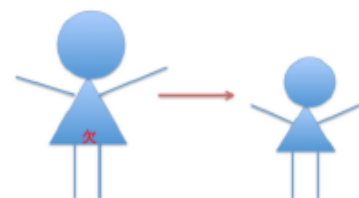


図3

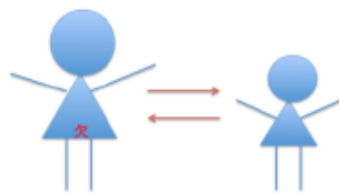


図4

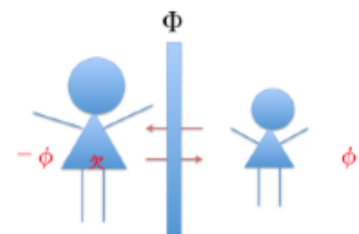


図5

「愛」がある。つまり、わたしたちは、愛に導かれて世界を創作し続けている。しかしながら、この愛には永遠に到達することができない。ですからこう(図6)なっているのです。

「狂っている」ということ

さらに言うなら、\$ から a に向かうこのベクトル自体が、もう既に、異常と言えば異常です。ヒト以外の動物では見られないものです。そういう意味でわたしが「人間という症候」と言う時、人間であることイコール症状を出しているということを指しています。まずこれが一つです。つまりこのファンタズムの式を見た時に、まず「人間はもともと狂ってますよ」ということを表わす式であると思っていただきたいのです。そしてその大きな枠組みの中で、個別にそれぞれ狂っている。

このベクトルの流れ(図6)の中で、狂う場所としては三つあります。

性的倒錯

たとえば $-\phi$ から Φ に移る時、 $-\phi$ に固執して Φ の受け入れを否認することが起こります。これがいわゆる性(的)倒錯です。つまり、性倒錯者は Φ を受け入れて入るのだけれども、このことを認めない。そして自らは $-\phi$ であろうとする。ダ・ヴィンチや美川憲一がその例です。興味深いことはどちらにも二人の母 Die zwei Mutter つまり産みの母と育ての母がいます。



精神病

次に Φ で起る場合。これには二通りあります。

「完全拒否」と「不完全拒否」。「完全拒否」の場合は、 Φ の場所が空席になってしまいます。この場合、一番目の Φ の場所が空席のまま、とりえず A (大文字の他者) に接続されてしまいます。例えて言えば、扇子の要の部分が残っていない状態です。扇いでいたらそのうちにパラバラになってしまう。これが精神病の発病に相当します。したがって Φ の「完全拒否」が精神病の根底にあり、ラカンはこの種の拒否のことを「排除 forclusion」と呼んでいます。

図6

ボーダーライン

「不完全拒否」の場合、よく見られる例としては、ネット上に匿名で登場するメンヘラと言われている人たち、リストカットや他者批判を繰り返しながら、不安定な状態でパソコンへ向かっているような人たちが挙げられるでしょう。このような人たちは、女性に多いのですが、ボーダーライン・ケース、日本語では境界例と呼ばれるような状態です。正常にもなれないし、精神病にもなれない、その中間に位置するゆえにボーダーラインと言う訳です。これは Φ から A への接続部分で生じる病態です。広い意味での神経症といってもいいでしょう。

ですから、わたしたちのコンパス、つまりこのファンタズムの式が頭のなかにあれば、この構成要素の中で、どこが異常になった時にどのような症状が出てくるかということを想定することができるのです。つまり、症状の原因が、 $-\phi$ のレベルなのか、 Φ のレベルなのか、それとも A のレベルなのかということを考えるのです。

精神病の治療と神経症の治療

たとえば Φ が欠如してしまった場合、これは精神病の基本構造になりますけど、この場合、治療というのは Φ を事後的にそこへ埋め直すことができるのかどうか問題になってきます。

これに対し、神経症では大文字の A のレベルでの話になります。こうして、各病態や症状を把握する場合は、このファンタズムの各要素の成立順位が大切になってきます。具体的には Φ が最初に取り込まれますが、これは最初の抑圧すなわち原抑圧が起こることを意味します。この時、何が抑圧されるかということ Φ の手前にある $-\phi$ が抑圧される訳です。そしてこの Φ は次ぎに来る大文字の他者 A によって抑圧されます。この抑圧を後期抑圧と呼びます。ですから抑圧の分数式を書く(図7)、 $-\phi$ 、 Φ 、A のそれぞれは三階建てビルみたいなものを形作っていることになります。もっと正確に表現するなら、これがビルとすれば、その下は全部地下(図7)。そしてわたしたちにはこの地上のビルしか見えないのです。しかしながら A の下には Φ が埋もれており、 Φ の下には $-\phi$ が埋もれています。ここで梶井基次郎の有名な言葉「桜の樹の下には死体が埋まっている」という表現を思い出してもよいでしょう。つまり $-\phi$ が埋まっているからこそ、大文字の他者 A という万華鏡のような世界を創り出すことが可能になっている、と。

そして神経症というのは、この抑圧された地下から A に何らかの影響が及ぶ事態なのです。つまりこの地上のラインが、抑圧のラインに相当し、地下から地上に向かって影響を及ぼす。ですから、神経症の場合は、地面に埋まっているナマズのようなもの、あるいはマグマのようなものを、治療という形で A の中へ解消あるいは回収することができれば、症状は消失すると考える訳です。これが神経症に対する精神分析治療の基本的な考え方です。つまり地下になにか、ガスの塊とか、エネルギーの塊のようなものが留まっていて、これが地上の A に悪影響を与えているとすれば、このエネルギーの塊が逃げることの出来る通路を造って、それを A の中に回収することで症状の消失を目論みます。

す。これは別の言い方をすると、上手く意味にならなかったエネルギーを意味に変換することによって解放してしまう行為です。これが神経症の治療です。

a

さらにビルの比喻を続ければ、空で輝いている太陽（図8）、これが a (objet petit a オブジェ・プチタ) に相当すると考えてよいでしょう。逆に辿るなら、太陽の下に到達不可能な空間を隔ててビルがあり、そのビルの下基礎の部分には Φ があり、そのさらに下には $-\phi$ が埋まっている、さらにその下には斜線を引かれた主体 $\$$ がいる。ですから、精神分析がしばしば精神の考古学に喩えられるのは、こういう階層構造が意識されているからなのです。

どのような場合でも、「心を病んだ」といわれる人に対峙するとき、わたしたちもまた心を病んでいることを深く自覚した上で、自身と他者の二つのファンタスムの対峙のなかから、自身も他者も、ファンタスムのどこに問題があるのかを常に自覚しておくことが治療における心構えの大前提になります。つまり、治療者とクライアントの関係は、取りも直さず二つの対峙するファンタスム相互の相対的な関係としてまず捉えなければなりません。もしこのことを忘れてしまうと、治療者は知らないうちに自らを特権的な場所に置き、従来型の治療者－患者関係という不毛な関係性のなかで治療の本質を見失ってしまうことになるでしょう。

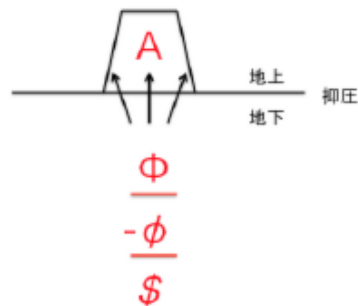


図7

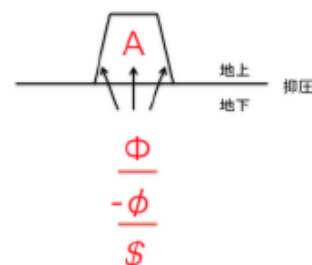


図8

PAGE TOP へ

[目次へもどる](#)

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
mars 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年3月発行 「セミナー通信 復刊第3号 2012年3月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====